

奇怪な再会

芥川龍之介

青空文庫

お蓮が本所の横網に囲われたのは、明治二十八年の初冬だった。

妾宅は御蔵橋の川に臨んだ、極く手狭な平家だった。ただ庭先から川向うを見ると、今は両国停車場になつている御竹倉一帯の藪や林が、時雨勝な空を遮つていたから、比較的町中らしくない、閑静な眺めには乏しくなかつた。が、それだけにまた旦那が来ない夜などは寂し過ぎる事も度々あつた。

「婆や、あれは何の声だろう？」

「あれでございますか？ あれは五位鷲でございますよ。」

お蓮は眼の悪い傭い婆さんとランプの火を守りながら、気味悪そうにこんな会話を交換する事もないではなかつた。

旦那の牧野は三日にあげず、昼間でも役所の帰り途に、陸軍一等主計の軍服を着た、逞しい姿を運んで来た。勿論日が暮れてから、厩橋向うの本宅を抜けて来る事も稀ではなかつた。牧野はもう女房ばかりか、男女二人の子持ちでもあつた。

この頃丸鬚まるまげに結ゆつたお蓮は、ほとんど宵毎よいごとに長火鉢を隔てながら、牧野の酒の相手をした。二人の間の茶ぶ台には、大抵たいていからすみや海鼠腸このわたが、小綺麗な皿小鉢を並べていた。

そう云う時には過去の生活が、とかくお蓮の頭の中に、はつきり浮んで来勝ちだった。彼女はあの賑やかな家や朋輩ほうばいたちの顔を思い出すと、遠い他国へ流れて来た彼女自身の便りなさ、一層心に沁しみるような気がした。それからまた以前よりも、ますます肥ふとつて来た牧野の体が、不意に妙な憎悪ぞうおの念を燃え立たせる事も時々あった。

牧野は始終愉快そうに、ちびちび杯さかずきを嘗なめていた。そうして何か冗談じょうだんを云つては、お蓮の顔を覗のぞきこむと、突然大声に笑い出すのが、この男の酒癖さけくせの一つだった。

「いかがですな。お蓮の方かた、東京も満更まんざらじやありませんまい。」

お蓮は牧野にこう云われても、大抵は微笑を洩もらしたまま、酒の爛かんなどに気をつけていた。

役所の勤めを抱えていた牧野は、滅多めったに泊とつて行かなかつた。枕もとに置いた時計の針が、十二時近くなつたのを見ると、彼はすぐにメリヤスの襯衣シヤツへ、太い腕を通し始めた。お蓮は自堕落じだらくな立て膝をしたなり、いつもただぼんやりと、せわしなそうな牧野の帰り仕

度へ、ものう 懶い流し眼を送っていた。

「おい、羽織をとつてくれ。」

牧野は夜中のランプの光に、あぶら 脂の浮いた顔を照させながら、もどかしそうな声を出す事もあつた。

お蓮は彼を送り出すと、ほとんど毎夜の事ながら、気疲れを感じずにはいられなかつたと同時にまた独りになつた事が、多少は寂しくも思われるのだった。

雨が降つても、風が吹いても、川一つ隔てた藪や林は、心細い響を立て易かつた。お蓮は酒臭い夜着の襟に、冷たいほお頬を埋めながら、じつとその響に聞き入っていた。こうしている内に彼女の眼には、いつか涙が一ぱいに漂つて来る事があつた。しかしふだんは重苦しい眠が、——それ自身悪夢のような眠が、間もなく彼女の心の上へ、昏々と下つて来るのだった。

二

「どうしたんですよ？ その傷は。」

ある静かな雨降りの夜、お蓮は牧野の酌をしながら、彼の右の頬へ眼をやった。そこには青い剃痕そりあとの中に、大きな蚯蚓みみずばれ脹が出来ていた。

「これか？ これは鼻かかあに引かつ搔かかれたのさ。」

牧野は冗談かと思うほど、顔色かおいろも声もけろりとしていた。

「まあ、嫌な御新造ごしんぞだ。どうしてまたそんな事をしたんです？」

「どうしてもこうしてもあるものか。御定まりの角つをはやしたのさ。おれでさえこのくらいだから、お前あなぞが遇あつて見ろ。たちまち喉笛のどぶえへ噛みつかれるぜ。まず早い話が満まん洲ゆうけん犬けんさ。」

お蓮はくすくす笑い出した。

「笑い事じゃないぜ。ここに居る事が知れた日にや、明日あしたにも押しかけて来ないものじゃない。」

牧野の言葉には思いのほか、真面目まじめ目めそんな調子も交まじっていた。

「そうしたら、その時の事ですわ。」

「へええ、ひどくまた度胸どきょうが好いいな。」

「度胸が好い訳じゃないんです。私の国わたくしの人間は、——」

お蓮は考え深そうに、長火鉢の炭火へ眼を落した。

「私の国の人間は、みんな諦めが好いんです。」

「じゃお前は焼かないと云う訳か？」

牧野の眼にはちよいとの間、狡猾そうな表情が浮んだ。

「おれの国の人間は、みんな焼くよ。就中おれなんぞは、——」

そこへ婆さんが勝手から、あつらえ物の蒲焼を運んで来た。

その晩牧野は久しぶりに、妾宅へ泊つて行く事になった。

雨は彼等が床へはいつてから、雲の音に変わり出した。お蓮は牧野が寝入った後、何故か

いつまでも眠られなかった。彼女の冴えた眼の底には、見た事のない牧野の妻が、いろいろ

な姿を浮べたりした。が、彼女は同情は勿論、憎悪も嫉妬も感じなかった。ただその想

像に伴うのは、多少の好奇心ばかりだった。どう云う夫婦喧嘩をするのかしら。——お蓮

は戸の外の藪や林が、雲にざわめくのを気にしながら、真面目にそんな事も考えて見た。

それでも二時を聞いてしまうと、ようやく眠気がきざして来た。——お蓮はいつか大

勢の旅客と、薄暗い船室に乗り合っている。円い窓から外を見ると、黒い波の重なった

向うに、月だか太陽だか判然しない、妙に赤光のする球があつた。乗合いの連中はど

うした訳か、皆影の中に坐つたまま、一人も口を開くものがない。お蓮はだんだんこの沈黙が、恐しいような気がし出した。その内に誰かが彼女の後へ、歩み寄つたらしいけはいがする。彼女は思わず振り向いた。すると後には別れた男が、悲しそうな微笑を浮べながら、じつと彼女を見下している。……

「金さん。」

お蓮は彼女自身の声に、明け方の眠から覚まされた。牧野はやはり彼女の隣に、静かな呼吸を続けていたが、こちらへ背中を向けた彼が、實際寝入っていたのかどうか、それはお蓮にはわからなかった。

三

お蓮に男のあつた事は、牧野も気がついてはいたらしかつた。が、彼はそう云う事には、頓着する気色も見せなかつた。また實際男の方でも、牧野が彼女にのぼせ出すと同時に、ぱったり遠のいてしまつたから、彼が嫉妬を感じなかつたのも、自然と云えば自然だつた。

しかしお蓮の頭の中には、始終男の事があつた。それは恋しいと云うよりも、もつと残酷な感情だつた。何故男が彼女の所へ、突然足踏みもしなくなつたか、——その訳が彼女には呑みこめなかつた。勿論お蓮は何度となく、変り易い世間の男心に、一切の原因を見出そうとした。が、男の来なくなつた前後の事情を考えると、あながちそうばかりも、思われなかつた。と云つて何か男の方に、やむを得ない事情が起つたとしても、それも知らさずに別れるには、彼等二人の間柄は、余りに深い馴染みだつた。では男の身の上にも、不慮の大変でも襲つて来たのか、——お蓮はこう想像するのが、恐しくもあれば望ましくもあつた。……

男の夢を見た二三日後、お蓮は銭湯に行つた歸りに、ふと「身上判断、玄象道人」と云う旗が、ある格子戸造りの家に出してあるのが眼に止まつた。その旗は算木を染め出す代りに、赤い穴銭の形を描いた、余り見慣れない代物だつた。が、お蓮はそこを通りかかると、急にこの玄象道人に、男が昨今どうしているか、占つて貰おうと云う氣になつた。

案内に依じて通されたのは、日当りの好い座敷だつた。その上主人が風流なのか、支那の書棚だの蘭の鉢だの、煎茶家めいた裝飾があるのも、居心の好い空気をつくつてい

た。

玄象道人は頭を剃つた、恰幅の好い老人だった。が、金齒を嵌めていたり、巻煙草をすばすばやる所は、一向道人らしくもない、下品な風采を具えていた。お蓮はこの老人の前に、彼女には去年行方知れずになった親戚のものが一人ある、その行方を占つて頂きたいと云つた。

すると老人は座敷の隅から、早速二人のまん中へ、紫檀の小机を持ち出した。そうしてその机の上へ、恭しそうに青磁の香炉や金欄の袋を並べ立てた。

「その御親戚は御幾つですな？」

お蓮は男の年を答えた。

「ははあ、まだ御若いな、御若い内はとかく間違いが起りたがる。手前のような老翁になつては、——」

玄象道人はじろりとお蓮を見ると、二三度下びた笑い声を出した。

「御生れ年も御存知かな？ いや、よろしい、卯の白になります。」

老人は金欄の袋から、穴銭を三枚取り出した。穴銭は皆一枚ずつ、薄赤い絹に包んであつた。

「私の占いは擲錢卜と云います。擲錢卜は昔漢の京房が、始めて筮に代えて行つたとある。御承知でもあろうが、筮と云う物は、一爻に三變の次第があり、一卦に十八變の法があるから、容易に吉凶を判じ難い。そこはこの擲錢卜の長所でな、……」

そう云う内に香炉からは、道人の燻べた香の煙が、明い座敷の中に上り始めた。

四

道人は薄赤い絹を解いて、香炉の煙に一枚ずつ、中の穴錢を燻じた後、今度は床に懸けた軸の前へ、丁寧に円い頭を下げた。軸は狩野派が描いたらしい、伏羲文王周公孔子の四大聖人の画像だった。

「惟皇たる上帝、宇宙の神聖、この宝香を聞いて、願くは降臨を賜え。——猶予未だ決せず、疑う所は神靈に質す。請う、皇愍を垂れて、速に吉凶を示し給え。」

そんな祭文が終つてから、道人は紫檀の小机の上へ、ぱらりと三枚の穴錢を撒いた。穴錢は一枚は文字が出たが、跡の二枚は波の方だった。道人はすぐに筆を執つて、巻紙にその順序を写した。

錢ぜにを擲なげては陰陽いんようを定め、——それがちょうど六度続いた。お蓮れんはその穴錢けの順序へ、心配そそそうな眼まなこを注そそいでいた。

「さて——と。」

擲て錢ぎせんが終おった時、老人らうじんは巻紙まきがみを眺ながめたまま、しばらくはただ考えていた。

「これは雷水らいすいかい解かいと云う卦けでな、諸事しよじ思うようにはならぬとあります。——」

お蓮れんは怯おず怯おず三枚さんまいの錢ぜにから、老人らうじんの顔かほへ視線しせんを移うつした。

「まずその御親戚ごしんせきとかの若い方かたにも、二度と御遇おあいにはなれそうもないな。」

玄象道げんしやうどうじん人はこう云いいながら、また穴錢けを一枚まいずつ、薄赤うすあかい絹きぬに包つつみ始めた。

「では生きては居ゐりませんのでしょうか？」

お蓮れんは声こゑが震ふるえるのを感じた。「やはりそうか」と云う氣きもちが、「そんな筈はずはない」と云う氣きもちと一ひとしよに、思おもわず声こゑへ出でたのだった。

「生きていられるか、死しんでいられるかそれはちと判はじ悪にくいが、——とにかく御遇おあいにはなれぬものと御思おもいなさい。」

「どうしても遇あえないでございましょうか？」

お蓮れんに駄目だめを押おされた道人だうじんは、金欄きんらんの袋ふくろの口くちをしめると、脂あぶらぎった頬ほのあたりに、ち

らりと皮肉らしい表情が浮んだ。

「滄桑の変と云う事もある。この東京が森や林にでもなったら、御遇いになれぬ事もありませんまい。——とまず、卦にはな、卦にはちやんと出ています。」

お蓮はここへ来た時よりも、一層心細い気になりながら、高い見料を払った後、そ
うそつち
々家へ帰つて来た。

その晩彼女は長火鉢の前に、ぼんやり頬杖をついたなり、鉄瓶の鳴る音に聞き入っていた。玄象道人の占いは、結局何の解釈をも与えてくれないのと同様だった。いや、むしろ積極的に、彼女が密かに抱いていた希望、——たといかにはかなくとも、やはり希望には違いない、万一を期する心もちを打ち砕いたのも同様だった。男は道人がほのめかせたように、實際生きていないのであろうか？ そう云えば彼女が住んでいた町も、当時は物騒な最中だった。男はお蓮のいる家へ、不相変通つて来る途中、何か間違いに遇ったのかも知れない。さもなければ忘れたように、ふつり来なくなってしまったのは、——お蓮は白粉を刷いた片頬に、炭火の火照りを感じながら、いつか火箸を弄んでいる彼女自身を見出した。

「金、金、金、——」

灰の上にはそう云う字が、何度も書かれたり消されたりした。

五

「金、金、金、」

そうお蓮が書き続けていると、台所にいた雇婆さんが、突然かすかな叫び声を洩らした。この家では台所と云つても、障子一重開けさえすれば、すぐにそこが板の間だった。

「何？ 婆や。」

「まあ御新さん。いらしつて御覧なさい。ほんとうに何だと思つたら、——」

お蓮は台所へ出て行つて見た。

竈が幅をとつた板の間には、障子に映るランプの光が、物静かな薄暗をつくっていた。婆さんはその薄暗の中に、半天の腰を屈めながら、ちようど何か白い獣を抱き上げている所だった。

「猫かい？」

「いえ、犬でございますよ。」

両袖を胸に合せたお蓮は、じつとその犬を覗きこんだ。犬は婆さんに抱かれたまま、水み々しい眼を動かしては、頻しきりに鼻を鳴らしている。

「これは今朝けさほど五味溜ごみための所に、啼ないていた犬でございますよ。——どうしてはいつて参りましたかしら。」

「お前はちつとも知らなかったの？」

「はい、その癖ここにさつきから、御茶碗を洗つて居りましたんですが——やっぱり人間の眼の悪いと申す事は、仕方のないもんでございますね。」

婆さんは水みずぐち口の腰障子を開けると、暗い外へ小犬を捨てようとした。

「まあ御待ち、ちよいと私も抱いて見たいから、——」

「御止およしなさいませよ。御召しでもよごれるといけません。」

お蓮は婆さんの止めるのも聞かず、両手にその犬を抱だきとった。犬は彼女の手の内に、ぶるぶる体を震ふるわせていた。それが一瞬間過去の世界へ、彼女の心をつれて行った。お蓮はあの賑にぎかな家うちにいた時、客の来ない夜は一しよに寝る、白い小犬を飼かっていたのだった。

「可哀かわいそうに、——飼かつてやろうかしら。」

婆さんは妙またたな瞬まきをした。

「ねえ、婆や。飼つてやろうよ。お前に面倒はかけないから、——」

お蓮は犬を板の間へ下すと、無邪気な笑顔を見せながら、もう肴でも探してやる気か、台所の戸棚に手をかけていた。

その翌日から妾宅には、赤い頸環に飾られた犬が、畳の上にいるようになった。

綺麗好きなお婆さんは、勿論この変化を悦ばなかった。殊に庭へ下りた犬が、泥足のままたつて来なぞすると、一日腹を立てている事もあった。が、ほかに仕事のないお蓮は、子供のように犬を可愛がった。食事の時にも膳の側には、必ず犬が控えていた。夜はまた彼女の夜着の裾に、まるまる寝ている犬を見るのが、文字通り毎夜の事だった。

「その時分から私は、嫌だ嫌だと思つていましたよ。何しろ薄暗いランプの光に、あの白犬が御新造の寝顔をしげしげ見ていた事もあったんですから、——」

婆さんがかれこれ一年の後、私の友人のKと云う医者に、こんな事も話して聞かせたそうである。

この小犬に悩まされたものは、雇^{やとい}婆^{ばあ}さん一人ではなかつた。牧野^{まきの}も犬が畳の上に、寝そべっているのを見た時には、不快そうに太い眉^{まゆ}をひそめた。

「何だい、こいつは？——畜^{ちくしやう}生^{せい}。あつちへ行け。」

陸^{りくぐん}軍^{しゆけい}主^{しゆ}計^{けい}の軍服を着た牧野は、邪^{じやけん}慳^{けん}に犬を足蹴^{あしげ}にした。犬は彼が座敷へ通ると、

白い背中の毛を逆^{さかだ}立てながら、無^{むしやう}性^{じやう}に吠^ほえ立て始めたのだった。

「お前の犬好きにも呆^{あき}れるぜ。」

晚^{ばん}酌^{しやく}の膳^{ぜん}についてからも、牧野はまだ忌^{いまいま}々^ましそうに、じろじろ犬を眺^{なが}めていた。

「前にもこのくらいなやつを飼^かっていたじゃないか？」

「ええ、あれもやつぱり白犬でしたわ。」

「そう云えばお前があのだと、何でも別れないと云い出したのにや、随分手こずらされたものだったけ。」

お蓮^{れん}は膝^{かみ}の小犬を撫^なでながら、仕方なさそうな微笑を洩^もらした。汽船や汽車の旅を続けるのに、犬を連れて行く事が面倒なのは、彼女にもよくわかつていた。が、男とも別れた今、その白犬を後^{あと}に残^{のこ}して、見^みず知らずの他国へ行くのは、どう考えて見ても寂^{さび}しかった。だからいよいよ立つと云う前夜、彼女は犬を抱^{かか}き上げては、その鼻^{はな}に頬^ほをすりつけながら、

何度も止めどない啜り泣きを呑みこみ呑みこみしたものだ。……

「あの犬は中々利巧だったが、こいつはどうも莫迦らしいな。第一人相が、——人相じやない。犬相だが、——犬相が甚だ平凡だよ。」

もう酔のまわった牧野は、初めの不快も忘れたように、刺身などを犬に投げてやった。

「あら、あの犬によく似ているじやありませんか？ 違うのは鼻の色だけですわ。」

「何、鼻の色が違う？ 妙な所がまた違ったものだな。」

「この犬は鼻が黒いでしょう。あの犬は鼻が赭うござんしたよ。」

お蓮は牧野の酌をしながら、前に飼っていた犬の鼻が、はつきりと眼の前に見えるような気がした。それは始終涎に濡れた、ちようど子持ちの乳房のように、鳶色の斑がある鼻づらだった。

「へええ、して見ると鼻の赭い方が、犬では美人の相なのかも知れない。」

「美男ですよ、あの犬は。これは黒いから、醜男ですわね。」

「男かい、二匹とも。ここの家へ来る男は、おればかりかと思つたが、——こりやちと怪しからんな。」

牧野はお蓮の手を突つきながら、彼一人上機嫌に笑い崩れた。

しかし牧野はいつまでも、その景氣を保っていられた。犬は彼等が床へはいると、古襖ふるぶすま一重隔ひとえてた向うに、何度も悲しそうな声を立てた。のみならずしまいにはその襖へ、がりがり前足の爪をかけた。牧野は深夜のランプの光に、妙な苦笑くしやうを浮べながら、とうとうお蓮へ声をかけた。

「おい、そこを開けてやれよ。」

が、彼女が襖を開けると、犬は存外ゆつくりと、二人の枕もとへはいって来た。そうして白い影のように、そこへ腹を落着けたなり、じつと彼等を眺め出した。

お蓮は何だかその眼つきが、人のような気がしてならなかった。

七

それから二三日経ったある夜、お蓮れんは本宅を抜けて来た牧野まきのと、近所の寄席よせへ出かけて行つた。

手品てしな、劍舞けんぶ、幻燈げんとう、大神樂だいかぐら——そう云う物ばかりかかっていた寄席は、身動きも出
来ないほど大入りおおいだった。二人はしばらく待たされた後のち、やつと高座こうざには遠い所へ、窮きゆう

くつ 屈な腰を下す事が出来た。彼等がそこへ坐った時、あたりの客は云い合わせたように、丸まるまげ鬚げに結ゆったお蓮の姿へ、物珍しそうな視線を送った。彼女にはそれが晴がましくもあれば、同時にまた何故なぜか寂しくもあつた。

高座には明るい吊つりランプの下に、白い鉢巻をした男が、長い抜き身を振りまわしていた。そうして楽屋がくやからは朗々と、「踏み破る千山万岳の煙」とか云う、詩をうたう声が起つていた。お蓮にはその劍舞は勿論、詩吟も退屈なばかりだつた。が、牧野は巻煙草へ火をつけながら、面白そうにそれを眺めていた。

劍舞の次は幻げんとう燈とうだつた。高座こうざに下おろした幕の上には、日にっしん清せん戦そう争の光景が、いろいろ映つたり消えたりした。大きな水みず柱はしらを揚げながら、「定てい遠えん」の沈没する所もあつた。敵の赤児を抱だいた樋口大尉ひぐちたいいが、突撃を指揮する所もあつた。大勢の客はその画えの中に、たまたま日章旗が現れなぞすると、必ず盛な喝かつさい采さいを送つた。中には「帝国万歳」と、頓狂な声を出すものもあつた。しかし実戦に臨んで来た牧野は、そう云う連中とは没交渉に、ただにやにやと笑つていた。

「戦争もあの通りだと、楽らくなもんだが、——」

彼は牛ニユーチャン莊チャンの激戦の画を見ながら、半ば近所へも聞かせるように、こうお蓮へ話しか

けた。が、彼女は不相變あいかわらず、熱心に幕へ眼をやったまま、かすかに頷うなずいたばかりだった。それは勿論どんな画でも、幻燈が珍しい彼女にとつては、興味があつたのに違ちがひなかつた。しかしそのほかにも画面の景色は、——雪の積つた城じやうろう、楼たうの屋根だの、枯かれ柳やなぎに繋つないだ兎うさぎ馬うまだの、辮べんぱつ髪かみを垂れた支那兵だのは、特に彼女を動かすべき理由も持つていたのだった。

寄席がはねたのは十時だった。二人は肩を並べながら、しもうた家やばかり続ついている、人ひと気けのない町を歩いて来た。町の上には半輪の月が、霜の下りた家々の屋根へ、寒い光を流ながしていた。牧野はその光の中へ、時々巻煙草まきたばこの煙を吹いては、さっきの劍舞でも頭あたまにあるのか、

「鞭べん声せい 肅しゆく 々しゆくしゆく 夜河を渡る」などと、古臭い詩の句を微吟びぎんしたりした。

所よこが横ちよう町ちようを一つ曲ると、突然お蓮は慳おびえたように、牧野の外がい套とうの袖そでを引いた。
「びつくりさせるぜ。何だ？」

彼はまだ足を止めずに、お蓮の方を振り返つた。

「誰か呼んでいるようですもの。」

お蓮は彼に寄り添いながら、気味の悪そうな眼つきをしていた。

「呼んでいる？」

牧野は思わず足を止めると、ちよいと耳を澄ませて見た。が、寂しい往来には、犬の吠える声さえ聞えなかつた。

「空耳だよ。何が呼んでなんぞいるものか。」

「気のせいですかしら。」

「あんな幻燈を見たからじやないか？」

八

寄席へ行つた翌朝だつた。お蓮は房楊枝を啣えながら、顔を洗いに縁側へ行つた。縁側にはもういつもの通り、銅の耳盥に湯を汲んだのが、鉢前の前に置いてあつた。冬枯の庭は寂しかった。庭の向うに続いた景色も、曇天を映した川の水と一しよに、荒涼を極めたものだつた。が、その景色が眼にはいると、お蓮は嗽を使いながら、今まで全然忘れていた昨夜の夢を思い出した。

それは彼女がたった一人、暗い藪だか林だかの中を歩き廻っている夢だつた。彼女は細

い路を辿りながら、「とうとう私の念力が届いた。東京はもう見渡す限り、人気のない森に変っている。きつと今に金さんにも、遇う事が出来るのに違いない。」——そんな事を思い続けていた。するとしばらく歩いている内に、大砲の音や小銃の音が、どことも知らず聞え出した。と同時に木々の空が、まるで火事でも映すように、だんだん赤濁りを帯び始めた。「戦争だ。戦争だ。」——彼女はそう思いながら、一生懸命に走ろうとした。が、いくら気負って見ても、何故か一向走れなかつた。………

お蓮は顔を洗ってしまうと、手水を使うために肌を脱いだ。その時何か冷たい物が、べたりと彼女の背中に触れた。

「しっ!」

彼女は格別驚きもせず、艶いた眼を後へ投げた。そこには小犬が尾を振りながら、頻に黒い鼻を舐め廻していた。

九

牧野はその後二三日すると、いつもより早めに妾宅へ、田宮と云う男と遊びに来た。あ

る有名な御用商人の店へ、番頭格に通つてゐる田宮は、お蓮が牧野に囲われるのについても、いろいろ世話をしてくれた人物だった。

「妙なもんじやないか？　こうやって丸髷まるまげに結つてゐると、どうしても昔のお蓮さんとは見えない。」

田宮は明いランプの光に、薄痘痕うすいものある顔を火照ほてらせながら、向い合つた牧野へ盃さかずきをさした。

「ねえ、牧野さん。これが島田しまだに結つていたとか、赤熊しゃぐまに結つていたとか云うんなら、こうも違つちや見えまいがね、何しろ以前が以前だから、——」

「おい、おい、この婆さんは眼は少し悪いようだが、耳は遠くもないんだからね。」

牧野はそう注意はしても、嬉しそうににやにや笑つていた。

「大丈夫。聞えた所がわかるもんか。——ねえ、お蓮さん。あの時分の事を考えると、まるで夢のようじやありませんか。」

お蓮は眼を外そらせたまま、膝ひざの上の小犬にからかつていた。

「私も牧野さんに頼まれたから、一度は引き受けて見たようなものの、万一ばれた日にや大事おおごとだと、無事に神戸こうべへ上がるまでにや、随分これでも気を揉もみましたぜ。」

「へん、そう云う危い橋なら、渡りつけているだろうに、——」

「冗談云つちやいけない。人間の密輸入はまだ一度ぎりだ。」

田宮は一盃ぐいとやりながら、わざとらしい洩じゅうめん面めんをつくって見せた。

「だがお蓮の今こん日にちあるを得たのは、實際君のおかげだよ。」

牧野は太い腕を伸ばして、田宮へ猪口ちよくをさしつけた。

「そう云われると恐れ入るが、とにかくあの時は弱つたよ。おまけにまた乗った船が、ちようど玄海げんかいへかかったとなると、恐ろしいしけを食くらつてね。——ねえ、お蓮さん。」

「ええ、私はもう船も何も、沈んでしまふかと思ひましたよ。」

お蓮は田宮の酌しやくをしながら、やっと話に調子を合わせた。が、あの船が沈んでいたら、今よりは反かえつて益ましかも知れない。——そんな事もふと考えられた。

「それがまあこうしていられるんだから、御互様おたがいさまに仕合せでさあ。——だがね、牧野さん。お蓮さんに丸髻まるむすが似合うようになる、もう一度また昔のなりに、返らせて見たい気もしやしないか？」

「返らせたかつた所が、仕方がないじゃないか？」

「ないがさ、——ないと云えば昔の着物は、一つもこつちへは持って来なかつたかい？」

「着物どころか櫛簪までも、ちやんと御持参になっている。いくら僕が止せと云つても、一向御取上げにならなかつたんだから、——」

牧野はちらりと長火鉢越しに、お蓮の顔へ眼を送った。お蓮はその言葉も聞えないように、鉄瓶のぬるんだのを気にしていた。

「そいつはなおさら好都合だ。——どうですか？ お蓮さん。その内に一つなりを変えて、御酌を願おうじやありませんか？」

「そうして君も序ながら、昔馴染を一人思い出すか。」

「さあ、その昔馴染みと云うやつがね、お蓮さんのように好縹緞だと、思い出し甲斐もあると云うものだが、——」

田宮は薄痘痕のある顔に、擦つたような笑いを浮べながら、すり芋を箸に搦んでいた。

……

その晩田宮が帰つてから、牧野は何も知らなかつたお蓮に、近々陸軍を止め次第、商人になると云う話をした。辞職の許可が出さえすれば、田宮が今使われている、ある名高い御用商人が、すぐに高給で抱えてくれる、——何でもそう云う話だった。

「そうすりやここにいなくとも好いから、どこか手広い家へ引越そうじやないか？」

牧野はさも疲れたように、火鉢の前へ寝ころんだまま、田宮が土産みやげに持って来たマニラの葉巻を吹かしていた。

「この家うちだつて沢山ですよ。婆やと私と二人ぎりですもの。」

お蓮は意地のきたない犬へ、残り物を当てがうのに忙いそがしかった。

「そうなたら、おれも一しよにいるさ。」

「だつて御新造ごしんぞうがいるじやありませんか？」

「かかあ鼻かかい？ 鼻とも近々別れる筈だよ。」

牧野の口調くちようや顔色では、この意外な消しょうそく息いきも、満更冗談とは思われなかった。

「あんまり罪な事をするのは御止しなさいよ。」

「かまうものか。己おのれに出でて己に返るさ。おれの方ばかり悪いんじゃない。」

牧野は険けわしい眼をしながら、やけに葉巻をすばすばやった。お蓮は寂しい顔をしたなり、しばらくは何とも答えなかつた。

「あの白犬が病みついたのは、——そうそう、田宮の旦那が御見えになった、ちようどその明くる日ですよ。」

お蓮に使われていた婆さんは、私の友人のKと云う医者に、こう当時の容子を話した。

「大方食中りか何かだったんでしよう。始めは毎日長火鉢の前に、ぼんやり寝ているばかりでしたが、その内に時々どうかすると、畳をよごすようになったんです。御新造は何しろ子供のように、可愛がつていらした犬ですから、わざわざ牛乳を取つてやつたり、宝丹を口へ啣ませてやつたり、随分大事になさいました。それに不思議はないんです。ないんですが、嫌じゃありませんか？ 犬の病気が悪くなると、御新造が犬と話をなさるのも、だんだん珍しくなくなつたんです。」

「そりや話をなさると云つても、つまりは御新造が犬を相手に、長々と独り語をおつしやるんですが、夜更けにでもその声が聞えて御覧なさい。何だか犬も人間のように、口を利いていそうな気がして、あんまり好い気はしないもんですよ。それでなくつても一度などは、あるからつ風のひどかつた日に、御使いに行つて帰つて来ると、——その御使いも近所の占いの所へ、犬の病気を見て貰いに行つたんですが、——御使いに行つて帰つて来ると、障子のがたがた云う御座敷に、御新造の話し声が聞えるんでしよう。こりや旦那

様でもいらしたかと思つて、障子の隙間から覗いて見ると、やっぱりそこにはたった一人、御新造がいらつしやるだけなんです。おまけに風に吹かれた雲が、御日様の前を飛ぶからですが、膝へ犬をのせた御新造の姿が、しつきりなしに明るくなったり暗くなったりするじやありませんか？ あんなに気味の悪かつた事は、この年になつてもまだ二度とは、出つくわした覚えがないくらいですよ。

「ですから犬が死んだ時には、そりや御新造には御氣の毒でしたが、こちらは内々ほつとしたもんです。もつともそれが嬉しかつたのは、犬が粗そそをするたびに、掃除そうじをしなればならなかつた私ばかりじやありません。旦那様もその事を御聞きになると、厄介やくかい払いをしたと云うように、にやにや笑つて御出でになりました。犬ですか？ 犬は何でも、御新造はもとより、私もまだ起きない内に、鏡きやうだい台たいの前へ仆たおれたまま、青い物を吐いて死んでいたんです。気がなさそうに長火鉢の前に、寝てばかりいるようになってから、これこれ半月にもなりましたかしら。……」

ちようど薬やげんぼり研堀いぢの市の立つ日、お蓮は大きな鏡台の前に、息の絶えた犬を見出した。犬は婆さんが話した通り、青い吐物とぶつの流れた中に、冷たい体を横たえていた。これは彼女もとうの昔に、覚悟をきめていた事だつた。前の犬には生いきわか別れをしたが、今度の犬には

死し別わかれをした。所詮しよせん犬は飼えないのが、持って生まれた因縁いんねんかも知れない。——そんな事がただ彼女の心へ、絶望的な静かさをのしかからせたばかりだった。

お蓮はそこへ坐つたなり、茫然と犬の屍骸しがいを眺めた。それから懶い眼ものうを挙げて、寒い鏡おもての面を眺めた。鏡には畳に仆れた犬が、彼女と一しよに映っていた。その犬の影をじつと見ると、お蓮は目まいでも起つたように、突然両手に顔おほを掩つた。そうしてかすかな叫び声を洩らした。

鏡の中の犬の屍骸は、いつか黒かるべき鼻の先が、赭あかい色に変わっていたのだった。

十一

妾宅の新年は寂しかった。門には竹が立てられたり、座敷には蓬菜ほうらいが飾られたりしても、お蓮れんは独り長火鉢の前に、屈くつ托たくらしい頬杖ほおづえについては、障子の日影が薄くなるのものうに、懶い眼ばかり注いでいた。

暮に犬に死なれて以来、ただでさえ浮かない彼女の心は、ややともすると発作的ほつきてきな憂鬱うゑに襲われ易かった。彼女は犬の事ばかりか、未いまだにわからない男の在りかや、どうかする

と顔さえ知らない、牧野まきのの妻の身の上までも、いろいろ思い悩んだりした。と同時にまたその頃から、折々妙な幻覚にも、悩まされるようになり始めた。――

ある時は床とこへはいった彼女が、やつと眠に就つこうとすると、突然何かのがつたように、夜着の裾がじわりと重くなつた。小犬はまだ生きていた時分、彼女の蒲団の上へ来ては、よくごろりと横になつた。――ちようどそれと同じように、柔かな重みがかかつたのだつた。お蓮はすぐに枕まくらから、そつと頭かしらを浮かせて見た。が、そこには搔かき巻まの格子模様こうしもようが、ランプの光に浮んでゐるほかは、何物もいるとは思われなかつた。……

またある時は鏡台の前に、お蓮が髪を直していると、鏡へ映つた彼女の後うしろを、ちらりと白い物が通つた。彼女はそれでも気をとめずに、水々しい鬢びんを搔かき上げていた。するとその白い物は、前とは反対の方向へ、もう一度咄とつさ嗟さに通り過ぎた。お蓮は櫛くしを持つたまま、とうとう後うしろを振り返つた。しかし明あかるい座敷の中には、何も生き物のけはいはなかつた。やつぱり眼のせいだつたかしら、――そう思いながら、鏡へ向うと、しばらくの後のち白い物は、三度彼女の後うしろを通つた。……

またある時は長火鉢の前に、お蓮が独り坐っていると、遠い外の往おう来らいに、彼女の名を呼ぶ声が聞えた。それは門の竹の葉が、ざわめく音に交まじりながら、たつた一度聞えたのだ

った。が、その声は東京へ来てても、始終心にかかっていた男の声に違いなかった。お蓮は息をひそめるように、じつと注意深い耳を澄ませた。その時また往来に、今度は前よりも近々ちかぢかと、なつかしい男の声が聞えた。と思うといつのまにか、それは風に吹き散らされる犬の声に変わっていた。……

またある時はふと眼がさめると、彼女と一つ床とこの中に、いない筈の男が眠っていた。迫ひたった額ひたい、長い睫毛まつげ、——すべてが夜半やはんのランプの光に、寸分すんぶんも以前と変らなかつた。左の眼尻めじりに黒子ほくろがあつたが、——そんな事さえ検くべて見ても、やはり確かに男だつた。お蓮は不思議に思うよりは、嬉しさに心を躍おどらせながら、そのまま体も消え入るように、男の頸くびへすがりついた。しかし眠を破られた男が、うるさそうに何か呟つぶやいた声は、意外にも牧野に違いなかつた。のみならずお蓮はその刹那せつなに、實際酒臭い牧野の頸くびへ、しっかりと両手をからんでいる彼女自身を見出したのだつた。

しかしそう云う幻覚のほかにも、お蓮の心を擾さわすような事件は、現実の世界からも起つて来た。と云うのは松もとれない内に、噂に聞いていた牧野の妻が、突然訪ねて来た事だつた。

牧野の妻が訪れたのは、生憎例の雇婆さんが、使いに行っている留守だった。案内を請う声に驚かされたお蓮は、やむを得ず気のない体を起して、薄暗い玄関へ出かけて行った。すると北向きの格子戸が、軒さきの御飾りを透せている、——そこにひどく顔色の悪い、眼鏡をかけた女が一人、余り新しくない肩掛をしたまま、俯向き勝に佇んでいた。「どなた様でございますか？」

お蓮はそう尋ねながら、相手の正体を直覚していた。そうしてこの根の抜けた丸鬚に、小紋の羽織の袖を合せた、どこか影の薄い女の顔へ、じつと眼を注いでいた。

「私は——」

女はちよいとためらった後、やはり俯向き勝に話し続けた。

「私は牧野の家内でございます。滝と云うものでございます。」

今度はお蓮が口ごもった。

「さようでございますか。私は——」

「いえ、それはもう存じて居ります。牧野が始終御世話になりますそうで、私からも御礼

を申し上げます。」

女の言葉は穏やかだった。皮肉らしい調子などは、不思議なほど罩こもっていないかった。それだけまたお蓮は何と云って好よいか、挨あい拶さつのしように困るのだった。

「つきましては今日こんにちは御年始かたがた、ちと御願ごんいがあつて参りましたんですが、——」
「何でございますか、私に出来る事でございましたら——」

まだ油断をしなかつたお蓮は、ほぼその「御願ごんい」もわかりそうな気がした。と同時にそれを切り出された場合、答うべき文句も多そうな気がした。しかし伏ふしめ目勝ちな牧野の妻が、静しずかに述べ始めた言葉を聞くと、彼女の予想は根本から、間違っていた事が明かになった。

「いえ、御願ごんいと申しました所が、大した事でもございませませんが、——実は近きん々きんに東京中が、森になるようでございますから、その節はどうか牧野同様、私も御宅へ御置き下さいまし。御願ごんいと云うのはこれだけでございます。」

相手はゆつくりこんな事を云つた。その容よう子すはまるで彼女の言葉が、いかに気違きいじみているかも、全然気づいていないようだった。お蓮は呆あ気あにとられたなり、しばらくはただ外光そむに背そむいた、この陰気な女の姿を見つめているよりほかはなかつた。

「いかがでございましたでしょうか？ 置いて頂けましたでしょうか？」

お蓮は舌が剛こわばったように、何とも返事が出来なかった。いつか顔を擡もたげた相手は、細々と冷たい眼を開あきながら、眼鏡めがね越しに彼女を見つめている、——それがなおさらお蓮には、すべてが一場の悪夢あくむのような、気味の悪い心地を起させるのだった。

「私はもとよりどうなつても、かまわない体でございしますが、万一路頭に迷うような事があります。二人の子供が可哀かわいそうでございます。どうか御面倒でもあなたの御宅へ、お置きなすつて下さいまし。」

牧野の妻はこう云うと、古びた肩掛に顔を隠しながら、突然しくしく泣き始めた。すると何故なぜか黙なつていたお蓮も、急に悲しい気がして来た。やっと金きんさんにも遇あえる時が来たのだ、嬉しい。嬉しい。——彼女はそう思いながら、それでも春着の膝の上へ、やはり涙を落している彼女自身を見出みだしたのだった。

が、何分なんぶんか過ぎ去のちつた後、お蓮がふと気がついて見ると、薄暗い北向きの玄関には、いつのまに相手は帰つたのか、誰も人影が見えなかった。

七草ななくさの夜よ、牧野まきのが妾宅まきのへやって来ると、お蓮れんは早速彼の妻が、訪ねて来たいきさつを話して聞かせた。が、牧野は案外平然と、彼女に耳を借したまま、マニラの葉巻ばかり燻くゆらせていた。

「御新造ごしんぞはどうかしているんですよ。」

いつか興奮し出したお蓮は、苛いらだ立たしい眉まゆをひそめながら、剛情なまに猶なも云い続けた。

「今の内に何とかして上げないと、取り返しのつかない事になりますよ。」

「まあ、なつたらなつた時の事さ。」

牧野は葉巻の煙の中から、薄眼うすめに彼女を眺めていた。

「鼻かかあの事なんぞを案じるよりや、お前こそ体に気をつけるが好いい。何だかこの頃はいつ来て見ても、ふさいでばかりいるじやないか？」

「私わたしはどうなつても好いいんですけれど、——」

「好よくはないよ。」

お蓮は顔を曇くもらせたなり、しばらくは口を噤つぶんでいた。が、突然涙ぐんだ眼を挙げると、「あなた、後ご生しょうですから、御新造ごしんぞを捨てないで下さい。」と云った。

牧野は呆氣にとられたのか、何とも答を返さなかつた。

「後生ですから、ねえ、あなた——」

お蓮は涙を隠すように、黒繻子の襟へ顎を埋めた。

「御新造は世の中にあなた一人が、何よりも大事なんですもの。それを考えて上げなくっちゃ、薄情すぎると云うもんですよ。私の国でも女と云うものは、——」

「好いよ。好いよ。お前の云う事はよくわかつたから、そんな心配なんぞはしない方が好いよ。」

葉巻を吸うのも忘れた牧野は、子供を欺すようにこう云つた。

「一体この家が陰気だからね、——そうそう、この間はまた犬が死んだりしている。だからお前も気がふさぐんだ。その内にどこか好い所があつたら、早速引越してしまおうじやないか？　そうして陽気に暮すんだね、——何、もう十日も経ちさえすりや、おれは役人をやめてしまふんだから、——」

お蓮はほとんどその晩中、いくら牧野が慰めても、浮かない顔色を改めなかつた。：

：

「御新造の事では旦那様も、随分御心配なすつたもんですが、——」

Kにいろいろ尋きかれた時、婆おばさんはまた当時の容よう子をこう話したとか云う事だった。

「何しろ今度の御病気は、あの時分にもうきざしていたんですから、やっぱりまあ旦那様始め、御諦おあきらめになるほかはありませんまい。現に本宅の御新造が、不意に横網よこあみへ御出でなすつた時でも、私わたくしが御使いから帰つて見ると、こちらの御新造は御玄関先へ、ぼんやりとただ坐つていらつしやる、——それを眼鏡越しに睨にらみながら、あちらの御新造はまた上ろうともなさらず、悪わる丁寧でいねいな嫌味いやみのありつたけを並べて御出でなさる始末しまつなんです。

「そりや御主人が毒どくづかれるのは、蔭かげで聞きいている私にも、好いい気きのするもんじやありません。けれども私がそこへ出ると、余計事がむずかしいんです。——と云うのは私も四五年前まえには、御本宅に使つかわれていたもんですから、あちらの御新造に見つかつたが最後、反かえつて先様さきさまの御腹立ちあおを煽あおる事になるかも知れませんまい。そんな事があつては大変ですから、私は御本宅の御新造が、さんざん悪あく態たいを御つきになつた揚句あげく、御帰りになつてしまふまでは、とうとう御玄関ふすまの襖ふすまの蔭かげから、顔を出さずにしまいました。

「ところがこちらの御新造は、私の顔かほを御覧になると、『婆や、今し方御新造が御見えなすつたよ。私わたくしなんぞの所へ来ても、嫌味一つ云わないんだから、あれがほんとうの結構けつこう人じんだろうね。』と、こうおつしやるじゃありませんか？ そうかと思うと笑いながら、

『何でも近々に東京中が、森になるって云つていたつけ。可哀そうにあの人は、気が少し変なんだよ。』と、そんな事さえおつしやるんですよ。……」

十四

しかしお蓮れんの憂鬱うれは、二月にはいつて間まもない頃、やはり本所ほんじよの松井町まついちようにある、手広い二階家へ住むようになって、不あいか相わらず変あ晴はれずそうな気色けしきはなかつた。彼女は婆さんときも口くちを利きかず、大たい抵ていは茶の間まにたつた一人、鉄瓶てつびんのたぎりを聞き暮くしていた。

するとそこへ移うつつてから、まだ一週間も経またないある夜、もうどこかで飲のんだ田宮たみやが、ふらりと妾宅めかけへ遊びあそびに來た。ちょうど一杯始はめていた牧野まきのは、この飲のみ仲間なかつの顔かほを見ると、早速手たてにあつた猪口ちよくをさした。田宮はその猪口ちよくを貰もらう前に、襯衣シャツを覗のぞかせた懐ふところから、赤い缶詰かんづめを一つ出した。そうしてお蓮の酌しやくを受けながら、

「これは御土産おみやげです。お蓮夫人。これはあなたへ御土産おみやげです。」と云つた。

「何なにだい、これは？」

牧野はお蓮が礼れいを云う間あいだに、その缶詰かんづめを取り上げて見た。

「貼紙ペーパーを見給え。臘肭獸おつとせいだよ。臘肭獸の缶詰さ。——あなたは気のふさぐのが病だつて云うから、これをも一つ献上します。産前、産後、婦人病一切いっさいによるしい。——これは僕の友だちに聞いた能書きのうがだがね、そいつがやり始めた缶詰だよ。」

田宮は唇を嘗なめまわしては、彼等二人を見比べていた。

「食えるかい、お前、臘肭獸おつとせいなんぞが？」

お蓮は牧野にこう云われても、無理にちよいと口元へ、微笑を見せたばかりだった。が、田宮は手を振りながら、すぐにその答えを引き受けた。

「大丈夫。大丈夫だとも。——ねえ、お蓮さん。この臘肭獸おつとせいと云うやつは、牡おすが一匹いる所には、牝めすが百匹もくっついていてる。まあ人間にすると、牧野さんと云う所です。そう云えば顔も似ていますな。だからです。だから一つ牧野さんだと思つて、——可愛い牧野さんだと思つて御上おあがんなさい。」

「何を云っているんだ。」

牧野はやむを得ず苦笑くしやうした。

「牡が一匹いる所に、——ねえ、牧野さん、君によく似ているだろう。」

田宮は薄痘痕うすいものある顔に、一ぱいの笑いを浮べたなり、委細いさいかまわずしゃべり続けた。

「今日僕の友だちに、——この缶詰屋に聞いたんだが、膾炙おつとせいと云うやつは、牡同志が牝を取り合うと、——そうそう膾炙おつとせいの話よりや、今夜は一つお蓮さんに、昔のなりを見せて貰もらうんだった。どうです？ お蓮さん。今こそお蓮さんなんぞと云っているが、お蓮さんとは世を忍ぶ仮の名さ。ここは一番音羽屋おとわやで行きたいね。お蓮さんとは——」

「おい、おい、牝を取り合うとどうするんだ？ その方をまず伺いたいね。」

迷惑らしい顔をした牧野は、やつともう一度膾炙おつとせいの話へ、危険な話題を一転させた。が、その結果は必ずしも、彼が希望していたような、都合つごうの好いものではなさそうだった。「牝を取り合うとか？ 牝を取り合うと、大喧嘩をするんだそうだ。その代りだね、その代り正々堂々とやる。君のように暗打ちなんぞは食わせない。いや、こりや失礼。禁句きんくき禁句きんくき看板かんばんの甚九郎じんくろうだっけ。——お蓮さん。一つ、献じましょう。」

田宮は色を変えた牧野に、ちらりと顔を睨にらまれると、てれ隠しにお蓮へ盃さかずきをさした。しかしお蓮は無気味ぶきみなほど、じつと彼を見つめたぎり、手も出そうとはしなかった。

お蓮れんが床とこを抜け出したのは、その夜の三時過ぎだった。彼女は二階ねの寝間うしろを後に、そつと暗い梯子はしごを下りると、手さぐりに鏡台の前へ行つた。そうしてその抽斗ひきだしから、剃刀かみそりの箱を取り出した。

「牧野まきのめ。牧野の畜生め。」

お蓮はそう呟つぶやきながら、静に箱の中の物を抜いた。その拍子に剃刀にの匂においが、磨とぎ澄とました鋼はがねの匂においが、かすかに彼女の鼻を打つた。

いつか彼女の心の中には、狂暴な野性が動いていた。それは彼女が身を売るまでに、邪じ慳やけんな継母ままとの争いから、荒すざむままに任せた野性だった。白粉おしろいが地肌じはだを隠したように、この数年間の生活が押し隠していた野性だった。……

「牧野め。鬼め。二度の日の目は見せないから、——」

お蓮は派手な長襦袢ながじゆばんの袖に、一挺の剃刀おほを蔽おほつたなり、鏡台の前に立ち上つた。すると突然かすかな声が、どこからか彼女の耳へはいつた。

「御止およし。御止およし。」

彼女は思わず息を呑んだ。が、声だと思つたのは、時計の振子ふりこが暗い中に、秒を刻んでいる音らしかった。

「御止し。御止し。御止し。」

しかし梯子はしごを上りかけると、声はもう一度お蓮を捉とらえた。彼女はそこへ立ち止りながら、茶の間の暗闇を透かして見た。

「誰だい？」

「私。私だ。私。」

声は彼女と仲が好よかった、朋輩の一人に違いなかった。

「一枝いっしさんかい？」

「ああ、私。」

「久しぶりだねえ。お前さんは今どこにいるの？」

お蓮はいつか長火鉢の前へ、昼間のように坐っていた。

「御止およし。御止しよ。」

声は彼女の問に答えず、何度も同じ事を繰返すのだった。

「何故なぜまたお前さんまでが止めるのさ？ 殺したって好いじゃないか？」

「お止し。生きているもの。生きているよ。」

「生きている？ 誰が？」

そこに長い沈黙があつた。時計はその沈黙の中にも、休みない振子ふりこを鳴らしていた。

「誰が生きているのさ？」

しばらく無言むごんが続いた後、お蓮がこう問い直すと、声はやつと彼女の耳に、懐しい名前を囁ささやいてくれた。

「金——金さん。金さん。」

「ほんとうかい？　ほんとうなら嬉しいけれど、——」

お蓮は頬杖ほおづえをついたまま、物思わしそうな眼つきになつた。

「だって金さんが生きているんなら、私に会いに来そうなものじゃないか？」

「来るよ。来るとき。」

「来るって？　いつ？」

「明日あした。弥勒寺みろくじへ会いに来るとき。弥勒寺へ。明日あしたの晩。」

「弥勒寺って、弥勒寺橋だろうねえ。」

「弥勒寺橋へね。夜来る。来るとき。」

それぎり声は聞こえなくなつた。が、長襦袢ながじゆばん一つのお蓮は、夜明前の寒さも知らない

ように、長い間あいだじつと坐つていた。

十六

お蓮は翌日の午過ぎまでも、二階の寢室を離れなかった。が、四時頃やつと床を出ると、いつもより念入りに化粧をした。それから芝居でも見に行くように、上着も下着もことごとく一番好衣着物を着始めた。

「おい、おい、何だつてまたそんなにめかすんだい？」

その日は一日店へも行かず、妾宅にごろごろしていた牧野は、風俗画報を拡げながら、不審そうに彼女へ声をかけた。

「ちよいと行く所がありますから、——」

お蓮は冷然と鏡台の前に、鹿の子の帯上げを結んでいた。

「どこへ？」

「彌勒寺橋まで行けば好いんです。」

「彌勒寺橋？」

牧野はそろそろ訝るよりも、不安になって来たらしかった。それがお蓮には何とも云え

ない、愉快な心もちを唆るのだった。

「弥勒寺橋に何の用があるんだい？」

「何の用ですか、——」

彼女はちらりと牧野の顔へ、侮蔑ぶべつの眼の色を送りながら、静に帯止めの金物かなものを合せた。

「それでも安心して下さい。身なんぞ投げはしませんから、——」

「莫迦ばかな事を云うな。」

牧野はぼたりと畳の上へ、風俗画報を抛ほうり出すと、忌々いまいましそうに舌打ちをした。……

「かれこれその晩の七時頃だそうだ。——」

今までの事情を話した後のちわたくし、私の友人のKと云う医者おもむろは、徐おもむろにこう言葉を続けた。

「お蓮は牧野が止めるのも聞かず、たった一人家うちを出て行った。何しろ婆さんなぞが心配して、いくら一しよに行きたいと云つても、当人がまるで子供のよううに、一人にしなければ死んでしまうと、駄々だだをこねるんだから仕方がない。が、勿論お蓮一人、出してやれたもんじやないから、そこは牧野が見え隠れに、ついて行く事にしたんだそうだ。

「ところが外へ出て見ると、その晩はちようど弥勒寺橋の近くに、薬師やくしの縁えんにち日ひが立っている。だから二つ目ふための往來おうらいは、いくら寒い時分でも、押し合われないばかりの人通りだ。

これはお蓮の跡をつけるには、都合つごうが好かつたのに違ちがひない。牧野まきのがすぐ後うしろを歩きながら、とうとう相手に氣きづかれなかつたのも、畢ひつきよう竟きやうは縁えん日の御蔭あきんどなんだ。

「往来あめやにはずつと両側えんに、縁えん日商にちあきんど人が並ならんでいる。そのカンテラやランプの明ありに、飴屋あめやの渦卷うずまきの看板かんばんだの豆屋まめやの赤あかい日傘ひがさだのが、右みぎにも左ひだりにもちらつくんだ。が、お蓮はそんな物ものには、全然ぜんぜん側目わきめもふらないらしい。ただ心こころもち俯向うつむいたなり、さっさと人ひとごみを縫ぬつて行くんだ。何でも遅おそれずに歩くのは、牧野まきのにも骨ほねが折よれたそうだから、余程よっぽど先まへを急いいでいたんだらう。

「その内うちに弥勒みろくじばし寺橋じまほしの袂たもとへ来きると、お蓮はやつと足を止とめて、茫然まげんとあたりを見廻みまわしたそううだ。あすこには河岸かたしへ曲まつた所に、植木屋うゑきやばかりが続ついている。どうせ縁日えんにち物ものだから、大おほした植木うゑきがある訳わけじやないが、ともかくも松まつとか檜ひのきとかが、ここだけは人足ひとあしの疎まばらな通とほりに、水々みづみづしい枝葉えだはを茂さからしているんだ。

「こんな所ところへ来きたは好こいが、一体いったいどうする氣きなんだらう？——牧野まきのはそう疑あいいながら、しばらくは橋はしづめの電柱でんちゆうの蔭かげに、妾めかけの容よう子すを窺うかがっていた。が、お蓮は不相變あいかわらず、ぼんやりそこに佇たんだまま、植木うゑきの並ならんだのを眺ながめている。そこで牧野まきのは相手あいての後うしろへ、忍しのび足あしにそつと近ちかよつて見たみた。するとお蓮は嬉うれしそうに、何なん度もこう云いう独ひとりり語ごを呟つぶやいてたと云いうじや

ないか？——『森になったんだねえ。とうとう東京も森になったんだねえ。』……………

十七

「それだけならばまだ好いが、——」

Kはさらに話し続けた。

「そこへ雪のような小犬が一匹、偶然人ごみを抜けて来ると、お蓮はいきなり両手を伸ばして、その白犬を抱き上げたそうさ。そうして何を云うかと思えば、『お前も来てくれたのかい？ 随分ここまででは遠かつたろう。何しろ途中には山もあれば、大きな海もあるんだからね。ほんとうにお前に別れてから、一日も泣かずにいた事はないよ。お前の代りに飼った犬には、この間死なれてしまうしき。』なぞと、夢のような事をしゃべり出すんだ。が、小犬は人懐っこいのか、啼きもしなければ噛みつきもしない。ただ鼻だけ鳴らしては、お蓮の手や頬を舐め廻すんだ。

「こうなると見てはられないから、牧野はどうとう顔を出した。が、お蓮は何と云つても、金さんがここへ来るまでは、決して家へは帰らないと云う。その内に縁日の事だから、

すぐにまわりへは人だかりが出来る。中には『やあ、別嬪べっぴんの気違いだ』と、大きな声を
出すやつさえあるんだ。しかし犬好きなお蓮には、久しぶりに犬を抱だいたのが、少しは気
休めになつたんだろう。ややしばらく押し問答をした後のち、ともかくも牧野の云う通り一応
は家へ帰る事に、やつと話が片附いたんだ。が、いよいよ帰るとなつても、野次馬やしうまは容易
に退くもんじやない。お蓮もまたどうかすると、弥勒寺橋みろくじばしの方へ引つ返そうとする。それ
を宥なだめたり賺すかしたりしながら、松井町まついちようの家へつれて来た時には、さすがに牧野も外がい套とう
の下が、すっかり汗になつていたそうだ。……」

お蓮は家へ帰つて来ると、白い子犬を抱いたなり、二階の寢室へ上のぼつて行つた。そうし
て真暗な座敷の中へ、そつとこの憐れな動物を放した。犬は小さな尾を振りながら、嬉し
そうにそこらを歩き廻つた。それは以前飼つていた時、彼女の寢台ねだいから石畳の上へ、飛び
出したのと同じ歩きぶりだつた。

「おや、——」

座敷の暗いのを思い出したお蓮は、不思議そうにあたりを見廻した。するといつか天井
からは、火をともした瑠璃燈るりとうが一つ、彼女の真上に吊つり下さがつていた。

「まあ、綺麗だ事。まるで昔に返つたようだねえ。」

彼女はしばらくはうつとりと、燦びやかな燈火を眺めていた。が、やがてその光に、彼女自身の姿を見ると、悲しそうに二三度頭を振った。

「私は昔の蕙蓮じやない。今はお蓮と云う日本人だもの。金さんも会いに来ない筈だ。けれども金さんさえ来てくれれば、——」

ふと頭を擡げたお蓮は、もう一度驚きの声を洩らした。見ると小犬のいた所には、横になつた支那人が一人、四角な枕へ肘をのせながら、悠々と鴉片を煙らせている！ 迫つた額、長い睫毛、それから左の目尻の黒子。——すべてが金に違いなかつた。のみならず彼はお蓮を見ると、やはり煙管を啣えたまま、昔の通り涼しい眼に、ちらりと微笑を浮べたではないか？

「御覧。東京はもうあの通り、どこを見ても森ばかりだよ。」

成程二階の亜字欄の外には、見慣れない樹木が枝を張つた上に、刺繡の模様がありそ
うな鳥が、何羽も気軽そうに囀っている、——そんな景色を眺めながら、お蓮は懐しい金の側に、一夜中恍惚と坐っていた。……

「それから一日か二日すると、お蓮——本名は孟蕙蓮は、もうこのK脳病院の患者の一人になつていたんだ。何でも日清戦争中は、威海衛のある妓館とかに、客を取つてい

た女だそうだが、——何、どんな女だった？ 待ち給え。ここに写真があるから。」

Kが見せた古写真には、寂しい支那服の女が一人、白犬と一しよに映っていた。

「この病院へ来た当座は、誰が何と云った所が、決して支那服を脱がなかつたもんだ。おまけにその犬が側にいないと、金さん金さんと喚わめき立てるじやないか？ 考えれば牧野も可哀けいれんそうな男さ。蕙蓮めかけを妾にしたと云つても、帝国軍人の片破かたわれたるものが、戦争後すぐきに敵国人を内地へつれこもうと云うんだから、人知れない苦勞が多かつたろう。——え、金はどうした？ そんな事は尋きくだけ野暮だよ。僕は犬が死んだのさえ、病気がどうかと疑ぎっているんだ。」

(大正九年十二月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年1月27日第1刷発行

1993（平成5）年12月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j:utyama

校正：かとうかおり

1998年12月19日公開

2004年3月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

奇怪な再会

芥川龍之介

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>